

双葉通信【第 183 回】(被災地に行く No.6) “被災地の切り捨ては許さない” 20230810

復活、じゃんがら踊り げんぱつ和尚 (早川篤雄和尚) が残した法被まとい

「福島県檜葉町の大谷地区にある宝鏡寺 (ほうきょうじ) には、半世紀にわたり反原発と非核を訴え続けた和尚、早川篤雄さんがいた。昨年、83 歳で亡くなった。早川さんが求めていたものがもう一つあった。新盆を迎えた故人を鉦 (かね) や太鼓を鳴らし踊りながら供養する「大谷じゃんがら念仏踊り」の完全復活だ。14 日、踊りを演じる地元保存会は町内の 8 軒を回り、原発事故で途絶えていた伝統行事を 13 年ぶりによみがえらせた。

青と白の生地には波の模様が描かれた新品の浴衣。「すてきな柄だね」「テンション、上がるわ」。大谷じゃんがら念仏踊り保存会の約 20 人が 14 日正午ごろ、地区の集会所で浴衣に袖を通した。浴衣は、保存会の顧問だった早川さんが生前に寄付した。保存会の会長を務める猪狩正興さん (74) が振り返る。「和尚は言ってました。来年こそは、なんでかんで (どうしても) 新盆の家を回ってくれと」

東京電力福島第一原発事故で全町避難となった檜葉町は、2015 年 9 月に避難指示が解除された。真っ先に地元に戻ったのが早川さんだった。避難先のいわき市でもじゃんがらを続けていた保存会は 20 年の夏に宝鏡寺の境内で踊り、地元復活を遂げた。次の年から従来通り新盆宅を回り、本来の姿に戻れると思ったが、新型コロナの影響で 2 年続けて中止となった。じゃんがら本来の姿に戻るのを見ることなく、早川さんは昨年 12 月逝った。新盆 8 軒の最後は宝鏡寺の早川さんの盆棚の前。「和尚が見ているぞ」と踊り手から掛け声がかかる。「よくやってくれたと、和尚は言っているに違いない」。猪狩さんはそう話した。

じゃんがら念仏踊りは、福島県の浜通り地方南部や茨城県北部などに伝わる夏の風物詩で、300 年以上の歴史があるとされる。大谷じゃんがら念仏踊り保存会は 2001 年、担い手不足を解消するため 46 人で発足した。その後の高齢化と原発事故の影響で、会員は 23 人にまで減った。大谷地区に生まれ、いわき市に家族で避難した高校 1 年の菅野愛羅 (あい) さん (16) は、今年デビューした。保存会で最年少だ。母聖子さん (46) はじゃんがら歴 30 年。愛羅さんは幼い頃から母に連れられ、見学していた。「最初は難しそうに見えたが、だんだん、できなくはないかなと思いはじめた。伝統を受け継ぐこともいいかなと」ダンスが得意で個人レッスンも受けているほど。猪狩会長らからは「のみ込みが早かった。将来が楽しみ」と期待される。

3・11 のときは町内の保育園にいた。「親とかが迎えに来るまで、みんなで毛布をかぶって待っていた」。そんな記憶が鮮明に残っているという。宝鏡寺の早川和尚のことも覚えていた。「明るくていつも笑顔の和尚さんでした」。和尚が長年、原発と闘い、避難者訴訟では全国でも有名な原告団長だった……とは知らなかったようで、「へえ、そんなすごい人だったんですか!」と感心していた。

伝言館は早川さんの「私物」だったが、原発事故を語り継ぐ意義を檀家 (だんか) が理解し、当面は存続させる方向になった。原発事故の前から非核問題をめぐり早川さんと親交のあった、いわき市の丹治杉江さん (66) が伝言館の事務局長を務めている。(私も毎週火曜

日の午後、伝言館の留守番をしています。）」(「朝日新聞デジタル」編集委員・大月規義 2023年8月16日 10時45分)



【ありし日の原発和尚・早川篤男さん(2022年12月29日死去(享年83歳))



【早川篤雄和尚の盆棚に向かって太鼓をたたきながら踊る菅野愛羅さん(右から2人目)=2023年8月14日午後5時40分すぎ、福島県檜葉町大谷の宝鏡寺】



【じゃんがら念仏踊りの後に演じる「笠踊り」=2023年8月14日午後5時50分、福島県檜葉町大谷の宝鏡寺】